

富山もよう プロダクト

もようが魅せる、ものづくり。



厳正な審査を経て

富山県内外の有識者で構成する「富山県推奨とやまブランド」育成・認定委員会が、「高い品質と信頼性・安全性」、「オリジナリティ」、「富山らしさ」、「市場性」、「将来性」の5つの基準で品目を評価し、厳正な審査を経て、「富山県推奨とやまブランド」の認定品を決定しています。

富山県の極上の産品

「富山県推奨とやまブランド」は、魅力ある富山県産品の中でも、とくに自信を持って誇れる極上の産品です。豊かな自然と歴史、そこで培われた人々の知恵や文化を「とやまブランド」の魅力と結びつけ、「富山県」の地域イメージとして国内外に発信しています。

富山県推奨とやまブランド
「富山もようプロダクト」認定事業者

富山もようプロジェクト
プロダクト運営委員会
富山市安住町2-14
TEL.076-445-3333
<https://toyamamoyou.jp/>



人と風土に、ストーリーがある
とやまブランド物語 VOL.23

富山県知事政策局 広報・ブランディング推進室
TEL.076-444-3574
<https://www.toyama-brand.jp/>



売薬の文化をうけつぐ、

現代的なテキスタイル。

「富山に芽吹いた印刷・図案の文化」

江戸時代に始まった富山売薬は、富山藩の手厚い保護を受け、幕末には全国の津々浦々に「富山のくすり」を配置販売する地場産業に育った。

「先用後利」の販売戦略とともに富山売薬の普及に「役買ったのが、各地の名所絵や当世人気の役者絵などを色鮮やかに刷り上げた「売薬版画」だ。売薬版画は、売売りが配置先への感謝の思いを届ける進物（ベルテイ）として用いられ、顧客を大いに喜ばせた。

医療の恩恵が届きにくく、娯楽も少なかった当時の農山漁村の人びとにとって、富山の売売りが家々を訪ねて届ける置き薬は、日々の安心とささやかな楽しみをもたらす希望の光でもあった。

やがて近代を迎えると、売薬は近代的な製薬業の礎となり、また売薬によって蓄積された資本をもとに、金融業や電力業、工業をはじめとする近代産業が富山県で興隆した。

胎となり、富山の地に印刷・図案の文化が芽吹いた。

「読者の心を和ませたラッピング紙面」

2014年、創刊130年を迎えた富山県の地方紙、北日本新聞は、読者への感謝の思いを込めたラッピング紙面「富山もよう」を、4日間連続で掲載した。

ラッピング紙面とは、新聞見開き1枚分の特別紙面で新聞全体を包む手法。富山が誇る立山連峰、シロエビ、水、ガラス工芸の4つのモチーフが日替

わりで登場するカラフルな紙面は、朝刊を手にする読者の心を和ませた。

「4日間連続のラッピング紙面は新聞史上でも初の取り組みとあって、地元読者はもちろん、全国からも注目を集めました」。

そう話すのは、富山もようプロジェクト・プロダクト運営委員会の松長菜々さん（北日本新聞社メディアビジネス局）。「地域のニュースを正確に伝えることが地方紙の使命です。その一方で、ふるさとを愛する気持ちを読者と共有し、地域

の暮らしを彩っていくことも大切な役割と考えています。富山もようのラッピング紙面は、情報だけではない新聞の新たな価値を生むことができたと感じています」。

大胆な構図と鮮やかな配色で、富山の風土の魅力を楽ししく伝える紙面デザインは、北欧フィンランドのアパレル企業のデザインを手がけ、自身のオリジナルブランド「OTTAIIPNU」も持つ国際のデザイナー、鈴木マサル氏が手がけた。

「富山もようは美しいデザインが何よりも魅力。その紙面を使って手作りエコバッグなどのオリジナルグッズを創作



カラフルなデザインが、新しい価値を生む。

北日本新聞創刊130年を記念し、2014年8月2日から4日連続で読者に届けられた富山もようのラッピング紙面



鈴木マサル氏／多摩美術大学染織デザイン科卒業後、専攻博デザイン室を経て1995年独立、2002年有限会社ウンピアット設立、2005年からファブリックブランド「OTTAIIPNU」主宰、フィンランド「marimekko」をはじめ、国内外のメーカー、ブランドのプロジェクトに参画



売薬商人が進物として得意先に配った売薬版画。江戸の浮世絵を模したものが多かったが、富山独特の図柄もあった。（富山市売薬資料館所蔵）



和紙工房桂樹舎の富山もようプロダクト ①ハガキ箱 ②ペン立て ③爪楊枝立て ④ポケットノート ⑤文庫カバー ⑥菜 ⑦メモ帳 ⑧名刺入れ



紙ふうせんづくりには、昔ながらの丁寧な手仕事が生きている

土地に根付いた もように息を 吹き込む。技が、

して楽しんでる読者もいると知って、予想外の反響の広がりには驚きました」(松長さん)。売薬版画に始まった富山のデザイン文化は、地域の暮らしを豊かに彩り、郷土愛を育むテキスタイルデザインとなつて現代に花を咲かせた。

「富山もようを 多彩なプロダクトへ」

「新聞ラッピングから出発した富山もようプロジェクトですが、ラッピングにとどまらない大きな可能性があることに気づきました」と、松長さんは話す。その気づ

印刷は通常の印刷機だが、紙ふうせんの形を作る折りや糊付けなどの工程は今も熟練職人の手作業が担う。なかには50年以上のベテラン職人もいる。

「売薬さんが届けた紙ふうせんのように、手にした人たちに笑顔が生まれる製品を届けていきたい」と、富山スガキの村上佳寛さんは話す。

おわら風の盆で知られる富山市八尾は、売薬の包み紙に用いられた「葉袋紙」づくりで栄えた歴史を持つ手漉き和紙の産地。

同地の和紙工房桂樹舎では、民藝運動を提唱した人間国宝の染色工芸家、芹沢銈介氏から教えを受けた型染め和紙の技法を現代に継承する。

濡れても破れない丈夫さを持つ手漉き和紙で作られる名刺入れ、ブックカバーなどの和

きは、地元企業と協働したグッズ開発の取り組み「富山もようプロダクト」へと発展する。明治10年創業の印刷・紙器メーカー、富山スガキ(富山市)もプロダクトに参加する企業のひとつ。葉のパッケージや紙ふうせんをはじめとする配置業の販促品づくりを通して、売薬とともに歩んできた歴史を持つ企業だ。

富山もようプロジェクト・プロダクト運営委員会の松長菜々さん。趣味は手作りクラフトの収集



紙製品は、美しさと実用性を兼ね備え、全国に根強いファンがいる。

「鈴木さんのデザインをもとに型染め用の型紙を起こし、一枚一枚を手染めして味わい深い色に仕上げています。富山もようのモダンなデザインは、型染め和紙の素材で温かな風合いとよく調和して、魅力ある品に仕上がっています」。桂樹舎代表の吉田泰樹さんはそう話す。

一本一本の繊維が細くて長いインド産の超長綿を紡いだ綿糸「フェザーコットン」の開発を手がける繊維メーカー、セルダム(富山市)も、富山もようプ



型染め和紙の型紙づくり作業を見まもる鈴木マサル氏



吸水性がよく、優しい肌触りが特徴のフェザーコットン製フェイスタオル

ロダクトに参加する企業だ。

フェザーコットンは敏感肌の赤ちゃんのために独自開発した。肌ざわりが滑らかで、吸水性・保湿性に優れ、肌への刺激が極めて少ないのが特徴だ。富山生まれのこの綿糸を使った高品質タオルの図柄にも、富山もようが採り入れられている。

セルダム代表の堀裕見子さんは、「肌トラブルに悩む人に、ぜひ使ってほしい製品です。富

山もようのデザインの魅力で、フェザーコットンの良さを全国に広げられたらと願っています」と、期待を寄せる。

【まちに溶け込む
富山もようのデザイン】

この他にも、富山のものづくり企業とのコラボレーションから生まれた多彩な「富山もようプロダクト」が、続々と登場している。

世界文化遺産の合掌造り集落にも近い五箇山和紙の里ファイブ（南砺市）では、富山もようを採り入れた手漉き和紙のベンケースを製作する。

高岡市の鍛造メーカー、ナガエが製作する「うちわソラノ」の扇面を彩るのも

もようが増えるほど、

富山がもっと好きになる。

富山もようのデザインだ。

グッズやアイテムばかりではなく、まちづくりや地域づくりに活用されている。

富山地方鉄道が運行しているラッピング車両「富山もようトレイン」は、富山もようを採り入れた限定チケットも人気を博した。

富山地铁立山駅では「富山もよう」のタペストリーが壁面を彩り、立山黒部アルペンルートを訪れる世界各国の観光客を迎えた。

再開発地区の工事仮囲いなどにも富山もようは活かされている。まちの風景のアクセントとして、また、シビックプラ

トとして、また、シビックプラ

イド醸成のシンボルとして、富山もようは、地域に深く溶け込んでいる。

「若い世代から年配の人たちまで、幅広い層に愛されている富山もようを通して、富山の魅力を全国に伝えていきたいと思えます」。松長さんは、目を輝かせそう話した。



富山もようは現在14種。2019年グッドデザイン・ベスト100にも選定された



雪景色の富山を走る「富山もようトレイン」



代表的な富山もようプロダクト ①うちわ ②紙ふうせん ③和紙ベンケース ④マウスパッド ⑤ランチョンマット ⑥フェイスタオル ⑦ハンカチタオル ⑧マスキングテープ ⑨手ぬぐい

message

パターンで表現された
富山の魅力の豊かな広がり

かわかみのりこ
川上典李子さん デザインジャーナリスト



テキスタイルデザイナー鈴木マサル氏の視点で表現される「もよう」の数々は、身近なものに改めて目を向ける喜びを私たちに教えてくれます。それだけでなく、魅力溢れる品々となって生活、社会にさらにとけ込む存在となっていることのすばらしさ。地域から生まれた「もよう」の躍動的な広がり、優れたデザインだけが拓くことのできる可能性やデザインの醍醐味が示唆されています。今後の展開も期待されるプロジェクトです。

【関連施設】



©小川聖雄

富岩運河環水公園に面して建つ美術館。「アートとデザインをつなぐ」をコンセプトに、「デザインあ展」(2018)、「鈴木マサルのデザインとみんなの富山もよう展」(2021)なども開催。富山もよう製品はミュージアムショップで取扱中。

富山県美術館

富山市木場町3-20
富山駅北口から徒歩約15分
076-431-2711
9:30~18:00
毎週水曜日、祝日の翌日
年末年始